

第6回 「日本語大賞」

テーマ

いま つた ことば
「今、伝えたい言葉」



高校生の部 優秀賞 受賞作品

カレーはヤミー

アメリカ

シアトル日本語補習学校

高等部 2年 今田 慧

カレーはヤミー

アメリカ シアトル日本語補習学校 高等部二年

今田 慧（いまだ・けい）

僕は四歳になつてすぐ、父の都合でアメリカに移り住んだ。それまで住んでいた日本での記憶はほとんどない。最初全く言葉の分からなかった保育園で、帰ろうとする母親に向かつて日本語で「お母さん、お母さん。」と泣き叫び、扉が閉まって母親が見えなくなると、追いかけないように僕を抱いていた保母の腕の中で、「マミー、マミー。」と英語に変えて叫んでいたらしい。その後、日本語やスペイン語で算数、理科の授業をする特別な小学校の日本語クラスに入学した。八歳の時に、英語の授業も分かるようになっていたので、一年上の算数と英文読解の授業を受けられる小学校に転校した。

そこは全科目の授業が英語でなされ、しかも前の小学校と違ってアジア人やアフリカ系、中米系の人たちが少なく、いわゆる白人の多い、アメリカで言うダイバーシティの低い小学校だった。アメリカの小学校では、全員が同じ給食を食べるのではない。教室でも食事をしない。各小学校に食堂つまりカフェテリアがあり、皆そこで食べる。カフェテリアでは、食べるときにお金を払う。メニューにはピザやスパゲッティ、ハンバーガーなど、いかにもアメリカな食べ物が多い。各家庭で作った、あるいは他の店で買った弁当をカフェテリアで食べることもできる。そのアメリカ人の弁当はピーナツバターとジャムのサンドイッチ二切れに、りんご一個かベビー人参、それとポテトチップかクッキーといった魅力に欠ける弁当だった。栄養のかたよったカフェテリアの料理を嫌って、僕の母は毎日弁当を作ってくれた。白飯の横に、卵焼きや豚肉の生姜焼き、タコの形のウィンナーソーゼージ、ミニトマト、野菜の煮物などが入った色取りもきれいな美味しい中身だった。

だが、見慣れない白飯や見たこともないおかずを満載した僕のお弁当を見た同じクラスの子は、僕を囲んでからかい始めた。「そんなもの食えるのか？」「何だあその白いの？」「パンは食べないんだ、日本人は。」など。今から考えるとうらやましさがあったのだろう。僕は、美味しんだぞって言い返そうとした。が、やめた。多勢に無勢である。言い合いをして、その拳げ句つかみ合いになつたりしたら、校長室に呼ばれるかもしれない。僕の大好きな赤シソのゆかりをかけた御飯は「何だそれ。アリだ、こいつアリ食ってる。」僕はその日、母にゆかりをご飯にかけないでくれと頼んだ。一番からかわれたのはカレーを持って行ったときだった。アメリカには日本の美味しいカレーはない。何日か経って、僕は昼休みにカフェテリアでお弁当を食べるのをやめた。なぜ、と悲しかった。お昼休みなんてないほうがいいとも思った。昼休みは三〇分しかないので、食べずに外で遊ぶことにした。もちろんお腹はすいた。午後の授業ではさらに強く感じた。しかし、お弁当を全く食べずに持ち帰ったら、「どうして食べないの？」とお母さんに怒られるかも知れない。

考えた末に、授業が終わって帰る前に、校庭で食べることにした。誰にも見えない校舎の陰に座って、お弁当を広げた。お腹が空いていたので、とても美味しく、一〇分で平らげた。これでお母さんに叱られることはない。

しかし、長くは続かなかった。母に見つかってしまったのだ。アメリカでは、スクールバスに乗らない小学生低学年は、必ず親が送り迎えするルールになっている。迎えに来た時に、校庭の片隅で弁当を食べている僕を見つけ出して、母はもちろん「なんで？」と強くきいてきた。何も言えなかった。口惜しさと悲しみが入り混じった涙しか出て来なかった。それから数日したある日、またカレーが弁当に入っていた。いつものように、放課後、校舎の裏で食べていた。ところが、運悪くいじめっ子の親分に見つかってしまった。「カフエテリアで見かけないと思ったら、今ごろこんな所で食べていたのか？」ブルドッグの顔に、見下すような意地悪い笑みが浮かんだ。「まだそんなグロテスクなもん食べてるのか。」僕は恐怖した。しかし、もう負けてはられない。勇気を出して言い返した。「うまいんだぞ、知らないだろう。嘘だと思わずなら食べて見る。」弁当を差し出した。彼は一瞬ひるんだ。「食べられないのか、この意気地なし。」弱虫と思われなくなかったのだろう、勇敢にひとさじ口に入れた。彼は目を丸くした。いつも食べているピーナッツバターサンドとは違う。「え、え、何だこれ。Yummy (yummy)！」と、また、さじを口に運んだ。

それから数ヶ月で引越したので、その学校からは転校した。新しい学校では、昼休みにカフエテリアで弁当を食べるようになった。そこでも日本のカレーライスは人気になった。旨いものは旨いのだ。どこの国に住んでいても、どんな色をしていても、みんな同じ人間だと思った。どんなにいがみ合っている国同士でも、美味しいものを一緒に食べれば分かりあえる。違いなんか無い、世界中、みんな同じ人間だ。